

青葉の笛

(平家の哀愁を詠った歌です)

一の谷で、源氏の武将・熊谷次郎直実くまがや じろすけ なるみは海に逃れようとしていた平家の若武者を呼び返し、組み敷きました。顔を見ると、自分の息子と同じ年配の少年だったので、見逃そうとしましたが、味方が近づいてきたので、やむなく首をはねました。それが平敦盛なるもりでした。その時に敦盛が腰に下げていたのが「青葉の笛」であったのです。

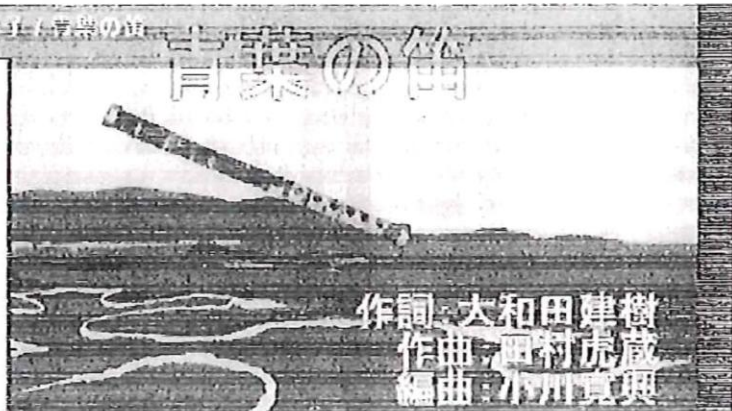
あとになって、熊谷次郎直実はこのできごとに世の無常を感じて出家したと伝えられます。

2番に出てくる「わが師」は『千載和歌集』の選者・藤原俊成ふげなる。俊成は藤原定家の父です。

忠度は平家都落ちの途中で京都に引き返し、深夜ひそかに俊成を訪ね、自作の何首かを託しました。そのうちの一首「さざ波や志賀の都はあれにしを管ながらの山ざくらかな」が『千載和歌集』に「詠み人知らず」で載っています。

俊成が「詠み人知らず」にしたのは、平家が朝敵のため、本名では載せられなかったことによります。

平忠度が箆へびら（矢入れ）につけていた「花や今宵」の歌は、「行き暮れて木の下陰を宿とせば花や今宵の主ならまし」。



作詞 大和田 輝樹
作曲 西村 虎蔵
編曲 小川 真典

① 一の谷のいくさ破れ
討たれし平家の公達あわれ
あかつき寒き須磨の嵐に
聞えしはこれか 青葉の笛

② 更くる夜半に門を敲き
わが師に託せし言の葉哀れ
今宵の箆に
残れるは「花や今宵」の歌



青葉の笛

大和田 輝樹 作詞
西村 虎蔵 作曲

可憐の情を以て (J=84)

いのちのたにのいくさや破れうたれし
へいけのさんだちあわれあかつきさむきすまの
あらし松きんたえしはこれかあおぼのふえ